



地域住民のニーズに応えられる
病院でありたい

profile

昭和50年3月29日生まれ。趣味は御朱印集め。入江4区在住。45歳。

Spotlight

スポットライト



洞爺協会病院院長

大浦 哲さん

「洞爺湖町の健康、安全、福祉を守る事が使命、地域の医療を守ることがこの病院の存在意義です」

洞爺協会病院としての役割を話すのは、今年4月に洞爺協会病院院長に就任した大浦哲さん。

大浦院長は、香川県三豊市の出身で高校卒業後、医師を志し、防衛医科大学校に入校。「両親がともに教員で、島の多い香川県では若い教員は島に勤務しなければなら

ず、母方の祖父に預けられて育ててもらったことが多かったです」と言い、高校3年生のときにその祖父が亡くなったことをきっかけに医師になることを決意しました。

卒業後、平成13年に北海道大学病院第1外科に勤務、市立函館病院や帯広協会病院などを経て、平成24年11月から平成30年6月までアメリカ合衆国にあるハーバード大学関連医療機関であるマサチューセッツ総合病院で大学講師と

して勤め、医師としての経験を積んできました。日本の医療のために働こうと思い、平成30年7月から、日本で勤めていたところに当直として勤務することもあった洞爺協会病院で勤務しています。

「生まれ育った三豊市と友好都市が結ばれていることに縁を感じますし、海・山・温泉などの自然が生み出した資源やおいしい食べ物があ、温暖な気候で暮らしやすく大好きなまちです」と洞爺湖町の印象を話します。

協会病院の医療体制について、「現在は、入院による透析治療、機能疾患や脳梗塞などの後遺症で麻痺がある患者やけがをした高齢者へのリハビリ、地域への訪問看護に力を入れています」と話します。

最後に大浦院長は、「今後も高齢化が進んでいく中で、訪問看護による対応や医療的なサポートをしっかりと継続し、住民のニーズには積極的に応えられる病院であり続けたいです」と意気込みを語ります。

東奔西走

イベントの取材が少なくなり、表紙に風景写真が続いていますが、改めて風光明媚なまちだと感じます。皆さんが活躍している姿を表紙にできる日が待ち遠しいです。(C.K)

初夏となり、暖かい日が続いてきました。例年6月は町内の小学校で運動会が行われていますが、今年は新型コロナウイルス感染症の影響で延期となっています。一生懸命練習に励む子どもたちの姿を見られないのがとても残念です。(M.O)

今月のワンショット



満開となった浮見堂公園の桜